

# 東白川村 美しい村づくり 委員会

## 第 22 回

○場所：ふれあいサロン

○時期：平成 30 年 2 月 20 日 19:00~21:00

○参加者：委員 5 名 行政 2 名

### 第 1 旧下親田地区 集落あるもの探しの振り返り

前回の集落歩き参加者 4 名全員が今回欠席のため、集落あるきの振り返りを今回も行うこととなりました。

#### 1 参加者の感想・意見

- (1) 案内役の方の通学路だった左広川では多くの淵に名前が付けられていた。子供たちも少なくなり、こういった淵の話も廃れていってしまう。ツチノコを発見した土地ならではの創造力ある話を聞くことができた集落あるきだった。
- (2) 案内役の子供の頃の通学路に対する愛着が感じられた。山の管理であったり、農業であったりを自分の手でやっているからこそ案内役の方は元気で居続けることが出来るのではないかと思った。
- (3) 集落ごとにキャッチフレーズを付けているが、非常に良いことだと感じている。参加者それぞれが感じたキャッチフレーズを表現してみてもどうか。
- (4) 大沢地区の集落あるもの探しで訪れた大きな岩へ、村外の知人を案内した。とても喜んでくれた。整備されていないことが良い。
- (5) 4 月には、もっと大きなかめ岩へ登山する計画を立てている。  
みんなで岩を見に行こう!!!

#### 2 次回集落あるもの探しについて

場所・・・神付地区

日程・・・3月21日(水・祝)(できれば午前中)

案内者・・・事務局にて依頼

## 第2 鯖江市役所JK課について（若者力）

前回の委員会にて、「高校生・大学生などからヒアリングを行い、率直な意見が語られる場の提供を検討していきたい！」との意見を受け、「平成27年度ふるさとづくり大賞」で総務大臣賞を受賞した「鯖江市役所JK課」について事務局で調査し、委員会にて共有しました。

### 1 その中で特に印象に残ったことは。

- (1) 大人は教育や指導はしない。彼女たちのサポートに徹する。
- (2) 高校生を変えることが目的ではない。行政や関係する大人たちの価値観・常識を変えることが目的。
- (3) JK課の活動を通して「本当の協働とは何か？」を考える。
- (4) 行政担当者は、「信じて待つ」というスキルをJK課で身につけた。
- (5) JK課の女子高校生たちは活動を通して地域の人とつながり、地域愛を育み、卒業しても地域に残るケースが多い。

「若者が動けば大人が変わる。大人が変われば地域が動く」担当者の方は「若者の力」をそう表現されていました。

## 第3 平成30年東白川村成人式参加者アンケート結果について

前回の委員会にて、若い世代の情報収集のあり方について知りたいとの意見が出たので、役場情報通信係にて成人式出席者から情報についてのアンケートを行い、その内容を報告しました。

### 1 内容

- (1) 友人との連絡手段は、LINEを利用
- (2) 情報収集はTwitterを利用
- (3) 1日で1番利用するコンテンツはLINEが多く、続いてYoutube、Twitterとなった。
- (4) Facebookの利用については、ほぼいない。
- (5) 東白川村の情報は4分の3人が取得していない。

## 2 意見

- (1) これから村外に情報を発信していく上でどういった方法が良いのか考えるきっかけとなった。
- (2) 村から離れた若者に対して村の情報について好意的な反応もあり、情報発信については需要がある。
- (3) 若い世代との交流や協働のあり方を、考えて実行していきたい。
- (4) 実際のところ、村で何かを発信していくよりは、Youtuber といった多くの人が見聞きする人に発信してもらう、といったことが情報発信する上で効果的である。

## 第4 フリートーク「移住者が東白川村に求めるものとは」

委員の方より、雑誌「アエラ」地方人口増の取り組みについての記事の紹介がありました。そこから、◆過疎地の状況◆Uターン者の心情◆移住者が求めるものとは？◆東白川村の魅力づくりへと話が盛り上がりました。

### 1 雑誌「アエラ」～ルポ地方の逆襲～人口増やすスーパー公務員より

- (1) この記事は、内閣府が出した「移住・定住施策の好事例集（第1弾）」にて選定された全18自治体へ取材した内容。
- (2) ～「里山資本主義」の藻谷浩介さんに聞く～より、美しい村づくり委員の方が紹介した内容。
  - ア じつは高齢化は、もはや地方よりも大都市圏の問題。
  - イ 理由、高度成長期に上京した世代が続々75歳を超え始めたこと。
  - ウ 過疎地では、高齢者が減り始める市町村が登場している。高度成長期に当時の若者を大都市部に出した分、新たに高齢者になる世代が少ないため。高齢者が少なくなり余ってくる医療福祉予算を子育て支援に回し若い夫婦のUターン・Iターンを増やして子どもの数も増え始めた自治体が登場している。
  - エ もう高齢者が増えない過疎地のほうが少子化対策は容易。
  - オ 福井県鯖江市「JK課」の記事

鯖江市の JK 課は地元への愛着につながる事業で実際に地元で高校卒業後も住み続けている人が多く、定住につながっている。事業自体が地域の方に理解・支持されていた。

## 2 委員の紹介からフリートークへ

- (1) 一度村の外に出ると、戻ってきたときは、自分はあまり周りの人のことを知らないが、逆に周りは自分のことを知っていた。戻ってきてくれたことに好感をもってくれていた。
- (2) Uターン時に、ホームなのにアウェイ感を感じた。
- (3) 出身者の呼び戻しについては家業があれば戻ってくる。
- (4) 郷土愛を育む活動が大切。JK課みたいに。
- (5) 移住施策に力をいれていくべき。
- (6) では、どんな村の魅力（移住希望者にとって）をつくっていけば良いのだろうか。
- (7) Uターン、Iターン者の求めていることは農業、健康なのか。
- (8) 移住者の方から、「何が入っているか分からないから、シャンプーは使わない。」と聞いた。移住者の多くが、「健康」「環境配慮」「自然」がキーワードとなる生活を求めているのではないか。
- (9) 健康・環境配慮・自然などを追及した家作りや、パンなどの食事、石鹸などの生活用品などで自然派な村というPRはどうか。
- (10) 自然派をすすめる上で、「学び」が必要。「体験」、「実践」も展開していこう。専門家や移住者、村の年配の方から学んでいこう。
- (11) 公共の場で自然派な実践をしていくと、「伝わる力」が高まる。
- (12) 交流サロンが自然派活動の拠点になるのはどうか。
- (13) まずは自分たちが出来る小さなこと、衣・食・住の面で始められることを実践していこう。
- (14) 官民連携として、村全体で取り組んでいくべきなのは。

美しい村として、ただ単に景観の視点だけではなく、その住民も健康で美しく持続的に生活できる地域であったほうが良いし、しいては、SDGs「持続可能な開発目標」に近づく世界の東白川村へ！に通じるように感じました。

今回は、「健康と持続可能な暮らし」をテーマに話し合います。



委員会の様子 ↓



以上